慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	はじめに
Sub Title	Preface
Author	渡部, 葉子(Watanabe, Yōko)
Publisher	慶應義塾大学アート・ センター
Publication year	2016
Jtitle	Booklet Vol.24, (2016.) ,p.5- 6
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000024-0005

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

はじめに

美術と批評――人の営みのあるところ、必ず相対する反応が生まれる。古代から現在に至るまで、美術があるところ、ある種の批評が生まれていたと言ってよいかもしれない。美術は視覚芸術として、眼によって捉えられるものである。人は常にそれについて語って来た、言葉にしてきた。そして美術にまつわるおびただしい量の言葉が紡がれ、蓄積して来た。その紡がれる言葉のありようもまた、時代を反映し、美術に相対し、美術を育み、時には甘やかし、美術もまた、それに応え、更に言葉が紡がれた。その長い関係性において、批評という営為が自覚的に形を為して来たのは近代においてと言ってよいだろう。それは美術に対して、画家や彫刻家、作品に対して、価値判断をもった言説が読者に届けられるということを意味していた。こうして成立した批評は、同時代美術への眼差しを言語化し、また、批評そのものの存在を自ら問いかけていくものとなる。そして、それは当然、同時代美術の生成とも分かちがたく結びつくものであった。

今回の特集は、美術における批評の役割とその可能性について、様々な時代やアプローチを通して考察しようとするものである。特に同時代美術に対する取り組みとしての批評の役割に着目し、大きなテーマとして「同時代美術への眼差し」という問題設定を想定した。

峯村敏明氏と沢山遼氏の論考は、この美術と批評の問題に正面から取り組んでいる。長く美術の現場に深くコミットしながら美術批評の実践を行って来た峯村氏は、自らの平行主義芸術観に根ざしながら、言語システムとしての芸術こそが、豊かな批評の可能性を担保するものであり、言語性を失った現況における批評の困難さを指摘している。その中で、河原温の日付絵画に絵画言語を見出し、対話性の回復――批評の可能性を展開している。一方、若手の論客として、活発に執筆活動を行い、美術批評そのものをも思考の対象として論じている沢山氏は、モダニズムを批判的に継承したポスト・モダン批評が構造主義に由来する言語モデルの徹底によって、結果的に「言語の牢獄」に幽閉されてしまった状況を分析している。それを脱する新たな批評の可能性を作品における「出来事」や「政治的なもの」の回復に見出していく。両者の論考は、片や言語性の喪失、片や言語の牢獄を批評の困難さとして論じているが、実はその時代背景と射程をある意味で相互補完するような形で、ともに批評の前提としての真の対話性と批評の本質的可能性を問うていると言えよう。

遠山公一氏の論考は、美術批評の出発点と言われるボードレールの批評について、その享受者への意識について歴史的に論じたものである。想像力を介して受け手が積極的に関与するというボードレールの想定は、その批評意識に深く根ざしている。それは批評が創造的行為であることを明らかにすると同時

に、詩人ボードレールの創作には批評が避けがたく含まれることも示唆している。享受者に関するボードレールの鋭敏な意識は現在にまで至る受容の問題に深く繋がっている。

平野千枝子氏、南雄介氏の論考は、それぞれローレンス・ウィナーの『ステイトメンツ』と河原温の《浴室》シリーズという具体的作品を対象としながら論じている。平野氏の論考はコンセプチュアル・アートの典型的な作例とみなされてきたウィナーの作品について、ミニマリズム、フルクサス、ポスト・ミニマリズムの彫刻と比較分析することによって、作者の主体、鑑賞者との関係、行為性などについて考察し、新しい解釈を展開している。ここで論じられる関係性には、ボードレールが創造力を介して連鎖させた関係性が反響しているのを見ることも可能であろう。最後の南氏は、河原温の絵画、《浴室》シリーズについての詳細な分析を施し、そこにその後に展開する河原の作品世界の萌芽——河原のアーティストとしての在り方——を見出している。図らずも最初の論考と最後の論考に河原が取り上げられる形となったが、一昨年、この世を去ったこの作家が優れて批評的な創造力の持ち主であったことを思うとき、これもまた、この特集に相応しいこととも言えるであろう。

最後に、多忙な中、ご執筆いただいた寄稿者の方々に心から感謝を表するとともに、本特集が同時代美術への新たな眼差しを引き出すことに少しでも貢献できれば幸いである。

（わたなべ　ようこ・慶應義塾大学アート・センター　教授・キュレーター／近現代美術史）